

獵犬探偵

稲見一良

Itsura Inami



新潮社

獵犬探偵

稲見一良 Itsura Inami

新潮社

りょうけん たん てい
獵犬探偵

著 者——稲見一良

© Emiko Inami 1994,

Printed in Japan



発 行——1994年5月20日

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71

電 話——営業部 03-3266-5111

編集部 03-3266-5411

振 替——東京4-808

印刷所——大日本印刷株式会社

製本所——大口製本印刷株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-392903-0 C0093

価格はカバーに表示してあります。

CONTENTS

第1話	
トカチン、カラチン	5
第2話	
ギターと猟犬	49
第3話	
サイド・キック	99
第4話	
悪役と鳩	157

装 画
石山博司
装 幀
新潮社装幀室

獵犬探偵

亡き父・勇に

トカチン、カラチン

師走^{しふ}の山の、ピンと張りつめたような冷氣の中を歩いてゐた。朝の露を溜めた膝を越す丈の枯草は、俺の足を濡らした。前に行くジョーが、すでに臭跡に乗っていた。

俺たちは、小次郎という犬を探していた。大物猟専門の秋田系の和犬である。半矢^{はんや}の猪を追ったまま帰ってこなかったのだ。今日で三日目になる。もし生きているとしても、今日中に見つけなければ助からない。

ここは京都府相楽郡^{さうらくぐん}の深い山である。猪の多い所だ。土地の猪猟^{しりやう}の頭^{かしら}白川が率いるグループは、一昨日子連れの猪を囲んだ。白川の見切りでは、数十キロはある久しぶりの大猪だった。数人のベテラン猟師が待ちを張り、白川は七頭の犬を次々と放して猪の寝屋^{ねや}に突っ込ませた。密集したカヤの寝ぐらから、黒い塊が躍り出た。白川は二発撃った。大猪は一番待ちを走って逃げた。数人が発砲した。

ちよつと遅れて四匹の子猪がとび出てきた。その場で皆撃ち倒された。だが母猪は逃げた。犬たちは猪を追つて姿を消した。点々と血を滴^{したた}らせていたし、猪が撃たれているのは確かだが、弾丸^{たま}は急所をそれていたのか、よほどタフなヒネ者なのだろう。やがて猪も犬も遠くなり、人は追えなくなった。

狩人たちは、いつものように焚火^{たきび}をして待った。こういう時は待つほかないのだ。日が暮れはじめた頃から、犬が一頭ずつ帰ってきた。すべての犬が傷ついていた。犬たちはどこかで大猪を吠えとめて、一斉に襲いかかったようだ。だが猪は戦い慣れた強者^{つわもの}だったのだろう。

猟犬たちは猪の牙で切られ、撥^はね上げられ、踏みにじられたようだ。犬は猪の前から襲い、後肢に噛みつき、右へ回り左から攻め、首筋にむしゃぶりつき、また跳びすさるというような戦い方をする。

だが犬たちは敗れた。焚火まで帰ってきた犬は、大なり小なり皆やられていた。なかには腹を裂かれて腸をはみ出させているのもいた。猟師たちはその場で、鉤^{かぎ}になった針で犬の腹を縫った。

リーダー犬の小次郎だけは戻らなかつた。とつぷりと暮れていた。男たちは火を消し、白川は着ている物を一枚脱いで焚火の跡に置いた。ようやくここまで帰ってきた犬は、主人のにおいのする物の上に寝て、朝を待つのだ。

翌日、白川は焚火の跡まで行つてみた。だが小次郎の姿はなかつた。寝た跡もなかつた。大

猪との戦いで深傷を負ってどこかで倒れているのか、死んでしまったのか……。

小次郎は近郷に聞こえた猪猟の名犬だ。すでに四十頭を越す猪を出し、獲っていた。小次郎を買い求めようとする猟人は多く、昨年は遠く四国から三百万出すといってきたのもいた。白川は一顧も与えず断わってきた。

その小次郎を探してほしいと白川が頼んできたのが、昨日の午後だった。猟から二十四時間は経っていた。昨日はひと時、雨が降った。小次郎がどんな状態にいるにしろ、生きていればの話だが、命あるうちに見つけるのは今日が限度だと思えた。

白川が持ってきた小次郎の寝床のポロ布で、ジョーに追うもののにおいを覚えさせて、早朝から山へ入っていた。猪や犬が消えたという方向を半日搜索した。

先ごろからジョーは高鼻を嗅ぎ、地鼻を這わせて、ようやく何かを追いはじめたのだ。

俺はポンプ銃を背から下ろして、ライフルスラッグともいう一粒弾を二発とバックシヨットという九粒弾をこめた。半矢とは手負いになった鳥獣のことだが、半矢の獣は危険だ。突然襲ってきたら、先ずバックシヨットをぶっ放してひるませておいて、そして一粒弾で仕留めるつもりだった。

藪の中でジョーが一声低く啼いた。小次郎を見つけていた。

大柄な日本犬が、草むらの中にうずくまっていた。犬は跳ね毘にかかって、胴を針金でくくられていた。錆びた針金を結びつけた立ち木を中心に、半径二メートルほどの所は踏みしだか

れて平らになっていた。

犬は吠えもせず、上目づかいに俺を見た。俺は犬に走り寄ったりしなかった。大物狼の和犬は気性の荒いのが多い。

何年か前のことである。狼野の昼めし時に、休んでいる犬に弁当のゆで玉子をふるまうてやろうとした狼師が、いきなり鼻を噛み切られたことがあった。何度も一緒に狼をした犬にだ。狼師はその後、欠けた肉団子のような鼻のまま狼を続けていた。

このように猪犬は人に馴れず、気位が高い。まして今は気が立っている。うかつに触れられないのだ。

畏の針金は硬く、ナイフの歯は立たない。俺は犬に穏やかに声をかけながら狼刀で立ち木を叩き伐った。針金の先端を持って犬に言った。

「小次郎、よく耐えた。さあ立つんだ。頑張つて歩け」

犬は体を起こした。

俺は針金で曳いた小次郎を連れて、山を下りた。後尾から、見守るようにジョーがついてきた。小次郎は体力を消耗しきっているようだったが、見たところ血は見えなかった。ゆっくりと歩き、二時間ほどかけて俺の車にたどりついた。

先ず水筒のぬるくなった茶を小次郎に与えた。小次郎はなめ尽くすようにして飲んだ。今は食い物をやっても食わないだろう。人馴れした洋犬と違い、猪狼の和犬には主人の与える物か、

自分で獲った獲物しか食わないのがいるのだ。

俺は小次郎を車の荷台にのせた。道具箱から出したペンチで、小次郎の胴に食い込んでいる針金を切断した。車を走らせて帰った。

俺は小次郎の優れた資質に感じ入っていた。罾にかかった獣は、逃れようとしてやみくもに暴れる。針金やトラバサミの歯を体に食いこませて、片肢を切断してしまったり、腹を半分切り裂いたりしてしまう。それが原因で死ぬものが多い。

小次郎は罾にかかったことを知り、賢明にも無駄なあがきをしなかった。針金の長さの範囲内を歩いて、草や体毛の水分をなめた。一雨降ったことが幸いした。水分だけは摂れたのだ。いたずらに体力を使うようなことをせず、救いを待っていたのだ。やるべきことをやって助かったのだ。

俺は町まで下りて、カー・テレホンを使って白川を呼び出した。

「小次郎を見つけた」

白川の驚き、喜びそして不安が電話から伝わってきた。

「で、生きてんのか？」

「跳ね罾に踏み込んでしまっていたが、じっと我慢していた。弱っているが、しっかりしている」
白川の安堵が見えるようだった。

「よかった！ よおやってくれた」

北摂の能勢の三万五千坪の山林の中の、わが家に帰りついた。この建物のことを、まるで砦のような人は言う。電柱の廃材を組み上げた、頑丈な納屋のような丸太小屋で、その裏に後で建て増したコンクリートの箱のような素っ気ない棟がくっついていてる。

アラカシの大樹が家の前にあって、入口には「竜門獵犬探偵舎」と大書した、道場の看板のような表札が掲げてある。

先ず缶ビールをジョーと分けあって飲んだ。飲みながら俺は、留守番電話のテープを聞いた。「かねまきどうたと申します。相談したいことがあってうかがいたいのですが……」

知らない名前の、初めて聞く声だった。俺はテープに残された番号に電話して、ここの場所と、明日来てもらう時間を決めた。大阪府の最北西の山中の俺の住いまでは、どこから来るにしても長いドライブになる。

早朝から京都の山中を歩いて、俺もジョーも疲れていた。今日はもう人と会いたくなかった。狼に似たジョーも床に長々と寝て、のびした前肢に顎を埋めてまどろみ始めた。

俺は救けた獵犬小次郎を、途中の町で持ち主の白川に渡してやった。フォードのピックアップ

ブですっとなってきた白川は、吊り上がった鋭い目や引きしまった口もとに、気の強そうな性格を見せていた。獣獵の頭らしい威圧感のある顔立ちだった。小次郎は主人を見てもじやれつこうとせず、尾をわずかに揺らせただけだった。白川は小次郎の体を探った。やはり数箇所切られていたが、幸い傷は浅かった。猪の牙をあわやのところで躲しながら戦ったのだろう。

白川は持ってきた四十万円の小切手をくれた。捜査を引き受ける時の十万は、すでにもらっていた。犬を見つけるまでの十万と、さらに生きて連れて帰った時の三十万で、俺の仕事の所定の金額だ。白川は別にいくらかの現金を包んだ封筒を、気持ちだけだと言ってくれようとしたが、俺はいつものようにそれを断わった。

「沈着で、すばらしい犬だ」

俺は小次郎を誉めて一言言^{ひとこと}った。白川はいかつい顔をにっと破顔させた。

「あんたもな」

白川はそう言って帰っていった。

翌日、決めた時間に男がやってきた。電話の声の印象より若い、三十前後の強い髯面の男だった。挨拶をして男が出した名刺には「企画・演出 金巻銅太」とあった。テレビのCMや短篇映画をやっていると聞いた。長い話になりますが聞かせていただきたい、と言って語りはじめた。

金巻は東京に住み、東京の制作プロダクションで仕事をしているが、得意先の広告代理店の要請でこちらに來ているといった。來年のクリスマスと冬休みを当てこんだ『聖夜物語』という題名の映画は、金巻の企画・脚本で、金巻は初めて劇映画を演出するべくやって來た。

五日前の朝のことである。大手広告代理店電東の營業局長と、系列の制作会社電東プロの營業部長、それに若い營業マンの三人に同行して「キタ動物ランド」を訪れた。場外の大きな駐車場に車を入れて下り、四人は五、六百メートル先の北邸^{きたて}に歩いていった。

左右は金網の囲いが広がる小動物園だった。いろんな鳥類が金網の中で飼われていた。草食動物の檻^{かぎ}があった。従業員らしい数人の作業服の人が、掃除をしたり動物に餌を与えたりして働いていた。

金巻はその時、かすかな笛の音を聞いたような気がした。やがて目当てのトナカイの檻が見えてきた。檻の中に七頭のトナカイがいた。褐色の体毛の大きな体に長い角を生やしたトナカイは、黒っぽい顔を一斉にあげて男たちを見た。

「何だか薄汚い動物だな」

局長が言った。機嫌が悪かった。自分ほどの地位の者が、早朝から出向いているのが、どれほど異例のことか、周囲に見せつけたがっているのだ。

「思ったより見栄^{みへ}えしませんな」

電東プロの部長が相槌^{あいつち}を打った。